

コ ラ ム

小さな文化摩擦

貿易摩擦に端を発した円高、ドル安が定着し、国際化の大波に日本中が洗われるなか、輸入諸制度の改革や産業構造の転換が叫ばれている。このような国家レベルでの法律や経済といったたいそうな面ばかりでなく我々の身の回りにおいても、外国の制度、慣習と我々のそれとの融合点を見出すのに苦慮することがある。

外国人との会話において困るのが漢字圏（中国、朝鮮）の地名、人名である。日本ではそれらに音読みを当てて記憶してしまうため、Chong Qing から重慶、Shi An から西安、Deng Shiao Ping から鄧小平、Hu Yao Bang から胡耀邦、Yiang Guei Fei から楊貴妃を頭に浮かべることは難しい。相手が漢字圏の外国人の場合には、そこは筆談という奥の手を使えばなんとか切り抜けられるとしても、漢字圏外の人間にはそうもならず会話がしり切れとんぼとなつてしまう。礼儀からすれば、外国の地名や人名はその国で用いられている発音にできる限り忠実に従うべきであると考え。ちなみに、「鉄と鋼」の毎年の最終号に載る索引を見ると、漢字で表示する外国人名はそれに日本語の音読みを当てて分類されている。この場合、一つの規則が存在する訳であるが、音読みできない漢字やアルファベットで綴られた人名はどうするのでしょうか。例えば、Szekely は「し」に分類されているが、これなどは分類に窮する例である。こうなつてくると日本人のみの投稿を前提として設けられた五十音順の分類は昨今の国際化の時代には機能しないことになる。

同じことはアルファベットの綴りを共有する西欧圏にも見られるようで、同一の都市が Vienna（英）と Wien（独）と使いわけられている場合もあるが、フランス語の読みで聞かされた歴史上の人名や地名が同定できず話に窮したという英国人の話を聞いたことがある。また、西欧文化との接点で困るのが氏と名の順である。「鉄と鋼」の誌上で著者名の記載を調べてみると、漢字圏については氏名の順であるが、アルファベット圏の人名は名氏の順となつている。したがって、共著者が日本人の場合、氏名順と名氏順の名前が並ぶことになる。日本研究学（Japanology）では西欧人といえども氏名の順に従っていると聞く。郷に入つては郷に従えで、氏名の順にするのが理屈ではないでしょうか。

長い歳月にわたり中国と日本で意味を異にした文字がある。おもしろいものとしては、「喝」は「飲む」、「湯」は「スープ」、「手紙」は「トイレットペーパー」、「愛人」は「妻」、「電腦」は「電子計算機」、「火車」は「汽車」、「汽車」は「自動車」、「娘」は「母親」、「勉強」は「頑張つて」の意味であると聞く。「トイレッ

トペーパー」を「手紙」とした中国人のセンスの良さには敬服する。ちなみに、日本語の「手紙」は「信」となるそうである。中国のホテルで朝洗面のためにお湯を筆談で注文したところ、待てど暮らせどお湯が届かず、へんだと思つているところへスープが来て髭も剃れなかつたという笑話もある。「お湯」は「熱水、開水」となるそうである。中国旅行の際にはお忘れなく。「愛人」=「妻」の構図は誠に現代中国にふさわしいものであるが、歴史上の中国人のイメージとはなせかしつくりこないのは私だけでしょうか。中国でも「計算機」なる言葉は用いられているようであるが、その他に「電腦」や「微機」といった表現もあるようである。いずれにせよ「電腦」とはよく言つたもので、第5世代のコンピューターも名前だけは中国に先取りされた感がある。日本語の「勉強」は中国語では「学習」となるそうである。正月休み火曜でぼんやりと「勉強」の由来を妄想してみた。遣隋使、遣唐使の中に勉強嫌いな者がいて、常に学習を怠つた結果、教育ママよろしく「勉強地堅持学習=勉めて学習をなさい」と申し渡されたのが、「地堅持」が落ちて「勉強」=「学習」の構図ができたとしては、学習嫌いな人間によくみられがちな早合点（私も思い当たる節がある）とすればつじつまが合うが、さて……？ 言葉の遊びは日中に限らない。我留学生によれば「ちやらんぼらん」なる日本語は意味を同じくしてイランにて「チャランパラ」と発音されるという。「ちやらんぼらん」は日本語らしくない言葉であるが、どの道を通つていつ日本に到来したのであろう。古典落語の「千早振る」の話¹⁾では、百人一首の「千早振る神代もきかず竜田川からくれないに水くぐるとは」の歌が、無学な先生のために歪曲され「千早」と「神代」が遊女の名に、「竜田川」が関取りの名に変ずる話であるが、文化摩擦に端を発したお遊びもこの辺で止めないと「勉強」という落語のねたにされかねない。

ついこの間まで聞かれた「豊かさ論」も今年の正月にはマスコミからすつかり影を潜め、「たいへん論」がたいへん幅を利かせている。駄洒落や落語が豊かさに通じるとは思わないがこのような時勢なればこそ「豊かさ」が求められてよいのではないのでしょうか。貿易摩擦も一種の価値感の相違から生じた文化摩擦であればあまり深刻に考える問題でないのかもしれない。長い歴史の中で常に異文化を吸収・消化してきた我が国民性（日本鉄鋼協会しかり）からして近い将来きつとよい解決策が見出されることでしょう。

文 献

- 1) 古典落語（上）（興津 要編）（1960），p. 148 [講談社]

（名古屋大学 浅井滋生）